

暁鐘の音

56

『休息』産業



景気の低迷が五年も続き、疲労がそろそろピークに達している。リストラとかリエンジニアリングという言葉も、最近では新鮮味を無くしたのか、新聞の活字になることは少なくなったよつである。といって、それが無くならなかったわけではない。多くの企業では肥大化し機能しなくなった組織の見直しに躍起になっている。この国では、アメリカと違って大胆な整理は出来ないし、社会的に受け皿が整備されていないため、徐々に手を付けるしかないのが実情である。

軽いマッサージを提供するといふもの。あるいはビルの屋上にテントを並べて、三分五 円で誰にも邪魔されない昼寝の場所を提供したり、最近では都内の百貨店でもサラリーマン用に無料の休息場所を提供するところが現れた。要するに疲れている。

これらは「産業」と呼べるほどの経済規模を持つていているわけではないが、一つの社会現象となつていことは確かである。

これまではこの種の「休息」は隠れてやつていた。外に出たときを利用(??)して、ちょっとパチンコに入つたり、ゲームセンターに入つてストレスを解消してきた。ちなみに都内のあるビルの地下のゲームセンターには、昼間は背広姿の人がカバンを足元において、一人でゲームに熱中している人で一杯である。私が見るかぎり二 代から五 代まで、だいたい人口構成と大きく違わぬように見える。缶コーヒのコーナーのように「ほっ」と息をつく場が欲しいのだ。

ではない。

リストラの嵐の中で、会社に「残る」ために無理を強いられている。「残る」ために限度以上に「頑張つて」いる。それでも、次は自分の番では? という思いは消えるわけではない。自分に求められているものがよく見えていない状態のまま、ひたすら不安を打ち消そうと頑張つているのである。だからいつときも心が休まることがない。

休息産業は、このような社会現象を鋭く読み取つたものとも言える。

本間に、「会社」はこのような「働き」を求めているのだらうか。休息産業が必要であつたような働き方を求めているのだらうか。確かに、今までは「違うもの」を「会社」は求めている。だがそれが「何」かは示せないまま、バランスシート上からの圧力で、リストラやリエンジニアリングに着手しているだけである。リストラやリエンジニアリングだけでは、未来は見えないし、そこに残つた人たちに、「新しい役割」を示すことは出来ない。

人間の体でも、必要以上に肥大化した部分や機能不全に陥つた組織は、時には切除するしかないかもしれない。しかしながら、手術をしたら誰でも生き生きとした生活を取り戻せるわけではない。そのような大掛かりな手術をした人間を生き返らせるには、未来への「夢」が必要である。いくら名医が執刀しても、生きる「夢」が与えられなければ生きられないのと同じように、「会社」も未来への夢が示せなければ、リストラやリエンジニアリングで体力が弱るだけで、生き生きとした組織にはならないだらう。その未来への方向

のなかで、「会社」が従業員に求めるものがつきりするはずだ。

間違いない、今「会社」は変わることを求められている。と同時にそこで働く人達も変わらなければならぬ。「あなたは何かができますか?」と質問されて明確に答えられないようでは、二十一世紀は覚束ない。

かつて日本が世界経済に対して果たした役割の半分は、今日ではアジアの国々が取つて代わらうつとしていゝ。横並びの大量生産は、もはや日本の独壇場ではなくなつた。獨創性

と生産性が求められている。何れも「発想」をかえなければ実現しないテーマである。にも関わらず、今までの発想のまま生産性を上げよつとするから、勢い各人の「持ち時間」を投入することしか浮かばない。だが、「会社」はそんなものを求めてはいないはずだ。もつとも、「会社」も自身が求めているものを明確に従業員に示せないでいるのだが。

会社が、前もつて「求める姿」を提示しなかつたことも、『休息産業』を産み出した要因ではないか。

「絵画にしる他のどんな芸術にしる、卓越した作品を生み出そうと意を決したなら、朝起きてから夜の眠りにつくまで全精神をそこに傾けなければいけない」

(レーノルズ・画家)

プログラムやソフトウェア・システムが「芸術作品」であるかどうかは、意見の分かれるところかも知れないが、それでもその人の「作品」であるということでは同意してもらえらるだらう。

その意味ではエンジニアの仕事は「優れた作品」を作ることであると云える。ただし、芸術作品と違つてその評価はより客観的であることが求められるが。

ソフトウェアの世界だつて、いいものを作らうと思えば、ある時期はそのことを考え続ける必要がある。眠りにつくまで、システムをどう構成すべきか、どの機能をどこに割り振るべきか。取り敢えずその機能を実現する方は手に入つても、もつと高速に処理するのはどうすればいいの

今月の一言

と考える必要がある。これらの事を粘り強く考え続けることによつて、より良いものが作られる。言い替えれば、「プロ」とはこれが出来る人のことでもある。すぐれた物を作りだすことに、必要な期間、自己をコントロール出来る人でもある。ソフットの世界にも、もつとすぐ「プロ」の時代が来るはずだ。いや「プロ」しか必要のない時代が来る。

ところで、最近のリーグの問題は、グラウンドにいる選手やレフリーは「プロ」であるはずなのに、「朝起きてから夜の眠りにつくまで全精神をそこに傾ける」ことが出来ない人が混じつていゝことである。サポーターやブライマンの前にいる人たちは、それを見つけてしまった。